



長野県東御市（とうみし）にある北国街道の宿場「海野宿」を紹介します。海野の地は、遠く千二百年前の奈良時代には附近一帯を海野郷と称し、早くから文化が開け、この地から献上された品が正倉院御物として残っています。



海野宿 写真提供：(一社) 信州とうみ観光協会

海野の高台に居をかまえた海野氏は、東信濃の軍事、交通の要衝をおさえ、その勢力は中信から北上州にまで広がっていました。江戸時代の北国街道は中山道と北陸道とを結ぶ重要な街道で、佐渡で採れた金の輸送や、北陸の諸大名が参勤交代で通った道であり、江戸との交通も頻繁で善光寺への参詣客も多く大変な賑わいを呈していました。明治時代に入り宿場の機能は失われてきましたが、海野宿の人々は宿場時代の広い部屋を利用して養蚕・蚕種業をはじめました。特に蚕種は広く関東地方から外国にまで売り出され「宿場の町から養蚕の町へ」と移り変わりました。この養蚕最盛期の明治・大正の時代に建てられた堅牢な蚕室造りの建物は、江戸時代の旅籠屋造りの建物とよく調和して現在まで残され、「日本の道百選」「重要伝統的建造物群保存地区」の選定を受けています。

その街並みの中に見られる卯建（うだつ）には幾種類もあり、妻壁（つまかべ）を一段高く上げて小屋根をつけたものが江戸時代の

もの【本卯建】であって、防火の役割りを果たし「火返し」とも呼んでいます。これが明治時代に入ると一階の屋根の上に張り出して意匠をこらし装飾を兼ねた袖壁（そでかべ）【袖卯建】が設けられるようになってきました。このような卯建は富裕の家の象徴であったといわれ「うだつが上がらぬ」という言葉も生まれています。



本うだつ（上）、袖うだつ（下）

また海野宿には格子戸（こうしど）のはまった家が続いています。一階の格子戸は明治以降に造られたものが大半で、二階格子の多くは出格子になっており、長短二本ずつ交互に組み込まれ海野宿特有の美しい模様を織り成しています。これらは、江戸時代のもので「海野格子」と呼ばれています。

海野宿には、現在も歴史の香り高い街並みが美しく残されています。是非、海野宿の魅力を探しに来てみて下さい。



海野格子

◆所在地…長野県東御市本海野  
◆アクセス

【公共交通】しなの鉄道しなの鉄道線「田中駅」及び「大屋駅」からタクシーで五分  
【自動車】東部湯の丸ICから車で十分

